

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句やアラビア数字（算用数字）を入れ、下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

『法の精神』の中でモンテスキューは、(1)共和政体を、人民全体あるいは単に人民の一部が主権をもつ政体と規定し、そして君主政体を、ただ一人が制定法に則して統治する政体と定義して、専制との差異を明記した。君主制に関しては、サリ系フランク族の慣習法を成文化した「サリカ法典」に依拠すれば、女性の王位継承権は認められてはいないと解釈することが可能であったため、その法典が有効な場合には女王の即位は難しかった。しかし、その法典の影響力の弱い国において、有力な男性の後継候補が不在であったケースでは、女性が国王として統治する事例が見られた。

15・16世紀のカスティリヤ王国では、二人の女王が登場した。イサベル女王は夫のアラゴン王フェルナンドとともにレコンキスタを完了させた。カトリック両王の娘であるファナは、ブルゴーニュ公フィリップ美公と結婚し、後に神聖ローマ皇帝となる（ A ）などの子供を生んだが、夫の死後、精神疾患を理由にして軟禁され、正式には女王から退位することなく皇帝（ A ）の統治下のイベリア半島で生活し、1555年に亡くなった。ファナ女王のもう一人の息子も、兄の帝位を継いでフェルディナント1世として皇帝に即位した。

スペイン王フェリペ2世が、三人目の王妃として迎えたのは、アンリ2世と（ B ）の間に生まれたフランス王女のエリザベート＝ド＝ヴァロワであった。ユグノー戦争末期のフランスでアンリ3世が暗殺されると、フェリペ2世は政治介入を行い、王妃エリザベートとの間に生まれた自分の娘イサベルをフランス王位につけようとして画策したが、「サリカ法典」の護持を掲げたフランス人からの反発を受けたため、女王の誕生は実現しなかった。結局、1589年に親王家出身のアンリ＝ド＝ブルボンがアンリ4世としてフランス王に即位した。なおアンリ4世の最初の妻は、（ B ）の娘マルグリット＝ド＝ヴァロワであったが、後に彼は別の女性と再婚した。

ウェストファリア条約の締結によって、1648年に三十年戦争は終結したが、この時クリスティーナ女王の治世下の（ C ）王国は、ブレーメンとフェルデンの両司教領に加えて、西ポンメルンなどを獲得してバルト海南岸に領土を拡大し、帝国議会に出席する権利を取得した。クリスティーナ女王は、国外からデカルトなどの文化人や芸術家を招いて、活発に文芸活動を支援した。彼女は1654年に（ C ）王位を従兄弟に譲り、正式にカトリックに改宗し、晩年は主にローマなどの外国で過ごした。

皇帝カール6世が定めた国事詔書を根拠にしてその娘マリア＝テレジアは、オーストリア継承戦争を経て、シュレジエン以外のハプスブルク家の所領を相続することはできたが、神聖ローマ皇帝に即位することはなく、1745年に皇帝に選出されたのは、彼女の夫である（ D ）であった。マリア＝テレジアは、シュレジエン奪回のために内政改革を行い、外交においてはフランスとロシアに接近し、

(2) 七年戦争でプロイセン王フリードリヒ 2 世を追い詰めたが、最終的には十分な戦果をえることはできなかった。1765年に皇帝（ D ）が没すると、マリア＝テレジアの長男ヨーゼフ 2 世が帝位を継承した。七年戦争期にオーストリアと同盟を結んでいたロシアの女帝エリザヴェータ＝ペトロヴナは、ピョートル 1 世の娘であった。(3) エリザヴェータの在位期に科学アカデミーの組織改革が実施され、モスクワ大学やペテルブルクの芸術アカデミーが創設され、ロシアの西欧化が進展した。エリザヴェータの次にロシア皇帝に即位したのは、甥のピョートル 3 世であったが、彼はクーデターで殺害されてしまった。1762年に帝位についたのは、ピョートル 3 世の皇后エカチェリーナ 2 世であった。ドイツ貴族出身のエカチェリーナ 2 世は、啓蒙専制君主としてロシアを統治して法典編纂や学芸保護に着手し、三度のポーランド分割やオスマン帝国との戦争などで領土拡大に成功し、1773年に勃発した（ E ）の農民反乱を鎮圧した。

ブリテン諸島の歴史の中では、(4) 1952年に即位した英国女王エリザベス 2 世を含めて、複数の女性君主が誕生した。1553年にテューダー朝の国王（ F ）が亡くなると、その異母姉のメアリ 1 世は、イングランド女王に即位した。皇帝（ A ）の従姉妹であったメアリ 1 世は、カトリック教会への復帰を目指して、1553年に（ F ）時代の宗教関連法を廃止する「廃棄法」を成立させた。次のエリザベス 1 世は、1559年に「国王至上法」と「統一法」を制定し、イングランド国教会を確立させて宗教的秩序の安定化を志向し、中央と地方の行政を整備し、議会との対話に留意しながら、絶対君主として統治した。ドレークやホーキンズらのイングランドの私掠船は、アメリカ大陸で産出された貴金属をスペインに運搬する商船に対して、襲撃を繰り返していた。エリザベス 1 世は、そのような私掠船の活動を奨励していたので、スペインとの関係は一層悪化した。フェリペ 2 世は、スペイン軍をイングランドに上陸させるための作戦を実行に移したが、スペイン無敵艦隊は、（ G ）年にイングランド艦隊に敗れ、多くの船舶を失って、母国に帰港した。

スコットランド女王メアリ＝ステュアートは、夫のフランソワ 2 世の死後、フランスから帰国し、女王として親政を開始したが、(5) その時には既に国内では宗教改革が広まっていた。女王がカトリックのダーンリ卿ヘンリ＝ステュアートと結婚したことによって、プロテスタントの臣下が次第に彼女から離反していった。1567年にダーンリ卿が暗殺されると、女王がそれに関与したのではないかという疑いをかけられた。そして反乱によって、メアリ＝ステュアートは強制的に退位させられ、幽閉された。その後彼女はイングランドに亡命したが、長期間軟禁状態に置かれ、1587年にエリザベス 1 世によって処刑された。なおメアリ＝ステュアートは、後のイングランド王ジェームズ 1 世の母である。

名誉革命後にメアリ 2 世は、夫のウィリアム 3 世とともにイングランドの共同統治者となった。1689年にイングランド議会で（ H ）法が制定され、カトリックと無神論者を除くピューリタンなどの非国教徒に信仰の自由が認められたが、彼らが公職につくことはできなかった。1694年にメアリ 2 世が若くして死去したので、ウィリアム 3 世が単独で王位についたが、彼も1702年に亡くなった。ステュアート朝最後の君主である（ I ）の時に、イングランドとスコットランドの合同が実現され、

大ブリテン王国が成立し、両国の議会は統合された。スペイン継承戦争でイギリスはフランスと戦い、1713年にユトレヒト条約を締結し、北アメリカや地中海で領土を獲得した。

ウィリアム4世の死後、1837年にその姪であるヴィクトリアが英国女王として即位すると、イギリスとの同君連合の関係にあったハノーヴァー王国は、「サリカ法典」に基づいて同君連合を解消した。この時にハノーヴァー王として即位したのは、ヴィクトリア女王の叔父のエルンスト＝アウグストであった。彼の時代に自由主義的な憲法が無効とされたことに対して、ゲッティンゲン大学の7人の教授が抗議したため、彼らは政府によって罷免された。その教授陣の中には、ドイツ語の単語と語源を網羅する『ドイツ語辞典』の編纂に着手した言語学者・文献学者として有名な（ J ）兄弟が含まれていた。ハノーヴァー王国は、1866年にプロイセンによって併合された。

設問（1）以下の国のうちで、現在では君主制に立脚した政治体制を保持しているが、17世紀に共和制国家として存在していた時期がある国をすべて選び、（ア）～（キ）の記号で答えなさい。

（ア）スイス （イ）デンマーク （ウ）ギリシア （エ）ポルトガル （オ）オランダ
（カ）フランス （キ）チェコ

設問（2）七年戦争と並行して英仏は、北アメリカにおけるフレンチ＝インディアン戦争で戦ったが、イギリスがそれに勝利してカナダやミシシッピ川以東のルイジアナを獲得した。1763年にこれらの戦争を終結させた平和条約が、イギリス、フランス、スペインの間で締結されたが、その条約の名称を記しなさい。

設問（3）フランスではフランス語の統一と純化などの目的のために、1635年にアカデミー＝フランセーズが学術団体として正式に発足したが、その創設に関わったフランスの宰相の名前を記しなさい。

設問（4）エリザベス2世在位中の1982年に、英国史上最初の女性首相サッチャーによって率いられた保守党政権が、アルゼンチンの進攻に対処した時の戦争の名称を記しなさい。

設問（5）ジュネーヴで亡命生活を送った後、『スコットランド信仰告白』の作成に関与してスコットランドにおける宗教改革の導入に貢献した聖職者で、『スコットランド宗教改革史』を著した人物の名前を記しなさい。

Ⅱ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を入れ、下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

イラク共和国の首都バグダードの都市としての歴史は、西暦8世紀の後半に始まる。アッバース朝第2代⁽¹⁾カリフの（ A ）は、762年から4年の歳月をかけて、⁽²⁾ティグリス川西岸の一村落であったバグダードに「マディーナ・アッサラーム（平安の都）」を造設した。直径2.35kmにおよぶこの巨大な円形の都城には、カリフの大宮殿である黄金門宮を中心として、大モスク、アッバース朝の諸官庁、官僚や軍人の居住区などが配置された。この円城の出現を機に、北アフリカから中央アジアへと広がるイスラーム帝国の首都となったバグダードには、間もなく円城の外にカルフ地区などの市場的な交換の場が発達していき、やがてバグダードは西アジアとインド洋海域・中央ユーラシア・地中海世界などを結合する国際的な交易ネットワークの中枢に位置する商業都市へと成長していった。そして、カリフの座所であるこの帝都は、イスラーム教の学術都市としても発展した。そこで活躍した学者の（ B ）は、『預言者たちと諸王の歴史』において天地創造からの人類史をアラビア語で叙述し、また、根本聖典『コーラン』の解釈学や伝承学などの分野にも大きな足跡を残した。

しかし、10世紀以降、アッバース朝の国力が低下の傾向を示すようになると、最盛期に人口100万人に達したともいわれるこのカリフの帝都は、地方の軍事諸政権による争奪の対象となり、戦乱に巻き込まれることになった。こうしたなか、カスピ海の南方に位置する山岳地帯のダイラムの地におこったブワイフ朝は、946年にバグダードに乗り込むと、カリフを自由に操るようになり、現在のイラクとイランの地域を実質的な支配下に置いた。ブワイフ朝は各地の地方政権の独立性が強く、分権的な政治体制を特徴とした。また、ブワイフ家は、その当主がスンナ派体制のアッバース朝の大アミール職を担っていたにもかかわらず、シーア派の⁽³⁾十二イマーム派を奉じた。他方でこの10世紀には、シーア派の一派であるイスマーイール派を奉じるファーティマ朝が現在のチュニジアの地に誕生した。同王朝は間もなく東方へと勢力を拡げ、肥沃なナイル川流域のエジプトを征服すると、969年に新たな首都のカイロを建設して強化した。このため、10世紀から11世紀前半にいたる時期を「シーア派の時代」と呼ぶこともある。

このような政治状況を一変させたのが、スンナ派のセルジューク朝の西進であった。中央アジアのアラル海東方で遊牧を営んでいたトルコ系軍事集団の西アジアへの進出は、イスラーム世界に新たな歴史的展開をもたらすことになった。セルジューク朝を建国したトゥグリル＝ベクは、アッバース朝カリフの要請を受けて1055年にバグダードに入城し、時のカリフから、「権力」や「権威」を意味する（ C ）という称号を授与された。以後、この称号は、スンナ派の軍人君主たちによって広く用いられるようになった。こうしたセルジューク朝の宰相で二人の君主に仕え、支配体制を整備したのが、有名なニザーム＝アルムルクである。ペルシア語文学の傑作である政治指南書の『統治の書』を著したこのイラン系教養人の官僚は、領内の各地にニザーミーヤ学院を建て、スンナ派の学問の振興に力を

注いだ。そして、バグダードのニザーミーヤ学院において教授を務めたのが、当代一流のスナ派法学者として知られた（ D ）である。ホラーサーン地方の町、トゥースに生まれたこの大学者は、宗教上の懐疑心を深めたことから、バグダードの恵まれた教授職を捨て、スーフィーとなって西アジアの各地を遍歴する遊行の生活をおくった。その後、彼は故郷の町に帰還すると、そこに修道場を構えた。また、彼は『宗教諸学の再興』を著し、⁽⁴⁾スーフィズムを重視した新たなスナ派思想を明示して後代に大きな影響を与えた。

セルジューク朝はシリアやアナトリアに領土を拡大し、ビザンツ帝国を圧迫した。しかし、11世紀末以降は政治的に分裂して衰退に向かい、シリアに十字軍諸国家の成立をゆるすことになった。しかし、同王朝によるスナ派体制の復興策は、その流れをくむザンギー朝、そしてサラディンが建てた（ E ）朝によって引き継がれていった。これらのスナ派王朝では、君主をはじめとした軍人たちによって、イスラーム諸学をおさめた⁽⁵⁾ウラマーが保護され、彼らの学術的な活動の場所としてイスラーム法学などの教育施設であるマドラサ（学院）がイラク、イラン、シリア、エジプトなどの諸都市に続々と新設された。そして、そのようなスナ派の高等教育の隆盛は、ルイ9世の第6回十字軍を契機として（ E ）朝のマムルーク軍団が打ち建てたマムルーク朝によっても継承されることとなった。

マムルーク朝が成立した13世紀は、ユーラシア大陸の東西にモンゴル帝国（大モンゴル国）が大きな広がりを示し、各地に様々な影響をおよぼした激動の時代であった。セルジューク朝のトルコ人マムルークが建てた（ F ）朝は、アム川の下流域を中心に中央アジアから西アジアへと版図を広げていたが、チンギス＝ハンが率いるモンゴル軍の遠征を受けてまたたく間に崩壊してしまい、1231年に滅亡した。チンギス＝ハンの孫でモンゴル帝国第4代皇帝となった（ G ）は、1254年、弟のフラグを西方遠征に派遣した。フラグは、イスマール派の教団勢力の拠点であったアラムートの要塞を陥落させ、1258年、ついにバグダードを攻略して時のカリフを殺害し、実に500年以上も続いたアッバース朝を滅ぼした。各地の政治権力者の統治を公式に正当化する機能をもっていたアッバース朝カリフ体制の消滅は、イスラーム世界全体に強い衝撃を与える大事件であったといえよう。この政治的な空白を埋める役割を担ったのが、パレスチナでのモンゴル軍との歴史的決戦に勝利したマムルーク朝である。同王朝の第5代君主の（ H ）は、その首都にアッバース家の生存者を招き、カリフとして擁立した。以後、マムルーク朝がオスマン帝国によって滅ぼされる1517年まで、エジプトの地にカリフ制が存続することになった。このアッバース家のカリフには、マムルーク朝における政治の実権は無かったが、各地のイスラーム王朝の君主は自らの地域支配の正当化を求めて、エジプトのカリフのもとに使節を派遣したのである。

このようにして、イル＝ハン国の統治下に入ったバグダードは、カリフの座所というそれまでの特別の地位を失うことになった。しかし、以後もイラクにおける中心都市としての役割は残った。バグダードは、16世紀のスレイマン1世の時代にオスマン帝国へと組み込まれ、この帝国によるイラクの

支配においてかなめの都市として位置づけられた。一時期はイランのサファヴィー朝との間の係争地となって激しい戦乱も経験したが、オスマン帝国によるイラク支配は20世紀初頭に至るまで、おおむね安定的に続いた。第一次世界大戦後の1920年、イギリスは、国際連盟が先進国に保護をゆだねる支配方式である（ I ）のもとにイラクを置き、ヒジャーズ王国を建てたハーシム家の（ J ）の子であるファイサルを翌年イラク国王として迎えた。このイラク王国がイギリスからの独立を達成したのは、1932年のことであった。その後、カセムを中心とした軍人たちのクーデターによるイラク革命で王制は廃止され、1958年にイラク共和国が誕生した。そして、イラク王国とイラク共和国の首都となったのは、やはりバグダードであった。

設問（1）第一次世界大戦後にイギリスに対してインドのイスラーム教徒たちがおこした、オスマン帝国のカリフの地位を擁護する政治運動は何と呼ばれるか、記しなさい。

設問（2）この大河の中流東岸に位置し、前8世紀からアッシリア王国の首都として栄え、また近代になってそこで発見された大量の粘土板がアッシリア学の発展を促すことになった、古代オリエントの都市の名称を記しなさい。

設問（3）この宗派の法学者たちによる指導体制を特徴とするイラン＝イスラーム共和国は、西暦何年に成立したか、アラビア数字（算用数字）で記しなさい。

設問（4）スーフィズムやヒンドゥー教のバクティ信仰などの影響を受け、ナーナクが創始した宗教の勢力が、後にインダス川流域のパンジャブ地方に建て、1849年まで続いた王国の名称を記しなさい。

設問（5）19世紀後半のイランで、カージャール朝によるイギリス人業者への利権の付与に対してウラマーと商人たちが主導して起こした、反英・反国王の運動は何と呼ばれるか、記しなさい。

Ⅲ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句やアラビア数字（算用数字）を記入しなさい。

モンゴル高原を支配したウイグルが内紛により衰退したのにもない、契丹が勢力を拡大して中国の華北に版図を拡大した。936年、契丹は後晋の建国を援助した見返りとして、農耕地帯である燕雲十六州を獲得した。その後、宋は燕雲地方の奪回をはかり攻撃をしかけるが、それを退けた契丹は、国境を維持したうえで宋から多額の銀や絹を贈らせるという条件で、1004年に（ A ）の和議を結んだ。契丹は遊牧民の民政・軍政を担当する北面官と、農耕民の民政を担当する南面官を置くことにより、遊牧民の部族制と漢族の州県制を取り込む二重統治体制を構築した。民族独自の文化や制度の維持をはかりつつ、漢族の統治機構も取り入れるという契丹の方針は、国号に契丹を用いる時期と、947年以降は中国風に改めた（ B ）を用いる時期とがあったことから窺い知ることができる。

12世紀前半、長らく契丹の支配下にあったツングース系の女真が太祖と諡される（ C ）のもとで台頭し、1115年に契丹から独立して金を建国した。金は宋と結んで契丹を滅ぼした後、華北に攻め込み宋の都の開封を占領した。靖康の変と呼ばれるこの争乱によって、宋の上皇の徽宗と皇帝の欽宗は北方に連れ去られ、皇帝の弟が南方に逃れて高宗として帝位につき南宋を再興した。南宋の朝廷では、金に対して和平策を講じる秦檜と抗戦を主張する岳飛が激しく対立したが、和平派が主導権を握ったことにより、黄河と長江の間を東西に流れて黄海にそそぐ（ D ）を境界として国境を定め、宋が金に対して臣下の礼をとるという条件で金と和議を結んだ。後世、秦檜は漢族を売ったとして激しい非難を浴びた。岳飛は悲劇の民族的英雄として人々に仰望され、彼を祀る杭州の廟は現在でも中国屈指の参拝客を誇る名所として賑わっている。

金は女真・契丹の統治に対しては部族制に基づく猛安・（ E ）の制度を適用し、漢族には州県制を採用して、契丹同様に二重統治体制を採用した。また文化面でも契丹が契丹文字を作ったのにならぬ女真文字を制定するなど、民族固有の文化の維持をはかった。しかし、女真固有の文化は次第に薄れて漢化してゆき、戦費による財政破綻ともあいまって国力が衰えて、やがてモンゴル帝国軍と南宋軍に挟撃されて金は滅亡することとなった。

モンゴル高原では、1206年、諸部族を統合したテムジンがクリルタイの推挙を受けてハンの位につき、チンギス＝ハンと称してモンゴル帝国を創建した。モンゴル帝国は金を滅ぼした後も遊牧民を糾合しつつ拡大を続け、中国北部からロシア、イランに及ぶユーラシアの広大な地域を支配下におさめた。チンギス＝ハンの孫で皇帝に即位したフビライは、大都（現在の北京）に都を置き、国号を中国風の元と称し、南宋を滅ぼして中国全土を支配した。元ではモンゴル人に次いで、色目人と呼ばれる中央アジア・西アジアの諸民族が官僚として重用され支配階級を形成した。漢族のうち金の支配下にあった人々は漢人、南宋の支配下にあった人々は南人と呼ばれて、モンゴル人・色目人の下位に置かれ、科挙の合格者数が大幅に減少したこともあり、儒学の伝統を奉じる漢族の士大夫が活躍する機会は大幅に失われることとなった。その一方で、元の文化政策は寛容であり、宋代以来の中国の

都市の庶民文化が栄えた。とりわけ元曲と呼ばれる戯曲が全盛期を迎え、唐代の伝奇小説『鶯鶯伝』をもとにして著された王実甫の『(F)』のように、後世の文芸に大きな影響を与える作品が数多く残された。

元の滅亡後、中国は再び漢族の統治による明の時代を迎えた。明の末期、ヌルハチは中国東北部の諸部族を統合して、満州人の軍事・行政制度に立脚する八旗を編成し、満州文字を創始するなど、民族の独自性を保持する制度を整備した。ヌルハチの後を継いだホンタイジは国号を中国風の清と改め皇帝を称した。(G) 年、李自成の乱により明が滅亡すると、清は占領した北京に都を遷し、李自成を倒して中国を支配下におさめた。

北方民族が中国を支配した王朝という点では元と清は共通しているが、科挙による明代の官僚制度を継承したという点において清の統治機構は元とは大きく異なっていた。清では重要な役職は満州人と漢人を同人数ずつ採用する制度をとるなど、漢人にも活躍の場が与えられた。しかしその一方で、満州から北京に移住した八旗の旗人のために民間耕作地を強制収用する(H)を実施するなど、漢人の不満を招く強硬な政策も推進された。

元が漢人の文化に寛容であったのに対して、清の漢人の文化に対する施策は尊敬と弾圧が混在するものであった。その傾向は、中国歴代皇帝のなかでも名君に数えられる康熙帝・雍正帝・乾隆帝という三代の皇帝においても顕著である。彼らは自らも中国の伝統的な文化や学術に通じる皇帝として君臨しながら、漢人に満州族の風俗である辮髪を強要して反清思想には厳しい弾圧を加えた。勅命により儒学者の紀昀が中心となって編纂された約八万巻の中国最大の叢書である『(I)』は、漢人の学者を動員した文化事業の成果であるが、それは同時に満州族の統治に対する漢人の不満のはけ口としての意味を有するものでもあった。『(I)』は古典研究に欠かすことのできない貴重な文献であるが、そこに採録されている文字のすべてが著作の元通りの姿を保っているわけではない。清の支配者たる満州人は、漢人が自らを「中華」と称し、周辺民族を「夷狄」と差別する華夷思想に敏感であり、反清思想とみなされる字句には容赦なく改竄が加えられ、文字の獄が引き起こされた。膨大な書籍を渉猟した叢書編集の国家的事業は、漢人の伝統的な学術の集大成であると同時に、反清思想をあぶり出して禁書の対象を選定するための調査という側面があったことも見逃してはならない。

19世紀半ばから動乱の時代を迎えた中国では、国家の存亡と民族の興亡の問題とが直結して浮上することになる。洪秀全を指導者とする太平天国は、辮髪をやめて漢族国家の復興を目指す「滅満興漢」を唱え、義和団は排外主義的な「(J)」のスローガンを唱えた。中国革命の父と呼ばれる孫文は「三民主義」において清朝打倒を訴えたが、後に中華民国のスローガンとして、漢族、満州族、モンゴル族、ウイグル族、チベット族の協調を謳う「五族共和」を唱えた。しかし、それはやがて諸民族を漢族に同化させて一大国家を築くという傾向を強めてゆくことになる。こうした民族の共存と競合は、漢族が約九割を占める現在の中華人民共和国においても、極めて現代的な多民族国家の問題として存続している。

Ⅳ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句やアラビア数字（算用数字）を記入しなさい。

世界史を振り返ると節目となる年がいくつかある。（ A ）年はそのようなものの一つである。この年にナスル朝の首都が陥落してレコンキスタが完了する一方で、そのさらに西ではヨーロッパの航海者が西インド諸島の島に到達して「サンサルバドル島」と命名し、聖なる救世主に感謝した。中世と近代の狭間に位置するようなエピソードだが、この年を軸として歴史の流れは激変し、ユーラシア大陸の西端に位置したヨーロッパが袋小路を脱して、また新しいパワーバランスが生まれようとしていた。

ヨーロッパの北ではカジミェシュ 4 世という君主がこの年に亡くなった。彼は当時ポーランドなどいくつかの国を支配する（ B ）朝に属し、この地域ではもっとも力がある人物の一人と見なされ、さらにボヘミアとハンガリーにも影響力を増そうとしていた。だがその間に東では（ C ）が統治するモスクワ大公国が急速に力を増していた。（ C ）はビザンツ帝国最後の皇帝の姪と結婚して威信を上げ、北西にあって 9 世紀以来経済的に栄える（ D ）国を 1478 年に併合し、モンゴル人の支配を退け、全ロシアの盟主をめざしていた。カジミェシュ 4 世の死後も（ B ）朝は 16 世紀まで存続するが、次第にパワーバランスは変化していった。

一方（ A ）年は南のフィレンツェにとっても転機となる年で、この都市を事実上支配する「市民」ロレンツォ＝デ＝メディチが死去した。手工業や金融業の中心として、また文化の発信地として繁栄したこの都市は、もともとは古代においてローマ人に先立ってイタリア半島中部、特にトスカナ地方で栄えた（ E ）人によって建設された。（ E ）人の民族系統はよく分かっていないが、ギリシア人などとの交易で栄え、独特の壺や美術品を残している。当初、フィレンツェは近隣の諸都市に水をあけられていた。たとえばこの都市の西に位置する（ F ）はロマネスク様式を代表する美しい司教座大聖堂などで有名で、十字軍にも軍船を提供したアルノ川沿いの港町として栄えており、近くには他にも古代ローマ以来の伝統を有するルッカや、ローマと北を結ぶ街道沿いにあるシエナもあり、フィレンツェはこれらの都市の後塵を拝していた。

都市の繁栄は、その象徴である司教座大聖堂の建設開始年からある程度推し量ることができるが、一步先んじる（ F ）とルッカは 1060 年代に、シエナは 1220 年頃に新たな建設を始め、フィレンツェの司教座大聖堂の建て替えが始まったのはようやく 1296 年であった。フィレンツェ市民は都市の栄光を誇るべく巨費を投じ、彫刻家でもあるブルネレスキはローマのパンテオンなどの古代建築に学んで司教座大聖堂の大ドームを設計した。ヴェッキオ宮殿前に置かれた「（ G ）像」は、ルネサンスを代表する巨匠によって制作され、現在はレプリカに置き換えられているが、この都市の自由と独立の象徴とされている。

『デカメロン』に描かれるように黒死病がフィレンツェも襲い、多くの人命を奪った。この危機は

乗り越えることができたが、経済の担い手の一つであった織物業の優位はさまざまな理由によって他国に追いつかれるようになり、金融業も融資の焦げ付きなどによって次第に不振に陥っていた。その上、イタリア半島はいくつもの地域勢力に分裂して対立しあっており、力を増しつつあった外国諸勢力の絶好の標的であった。ロレンツォ＝デ＝メディチが死去すると、危機が顕在化し、どうにか抑えていたパワーバランスが大きく動いた。フランス王は王族アンジュー家の権利を継承していると主張して南下し、この都市の近くに軍を進めた。この危機に新当主ピエロは対処できずに逃亡し、すでに弱体化していた体制は崩壊した。代わって成立した政権は多くの有力市民が参加したものだったが、これはフィレンツェに対する神罰であると宗教指導者サヴォナローラは激しく説き、生活を改めるよう求めた。このとき「春（プリマヴェーラ）」などの作品で知られる画家（ H ）は絵筆を一時捨てたと伝えられる。

その後も外国諸勢力はこの地域の覇権をめぐる侵攻し、何十年にもわたって戦争が断続的に続けられ、最終的に1559年に（ I ）条約が締結されて、イタリア戦争が終結し、事実上イタリア半島は外国諸勢力の支配下に置かれることになる。イタリア戦争の時代に軍事や外交活動に従事し、失意のうちにそこから離れざるをえなかった（ J ）は、モラルの縛りを捨て去って冷厳な現実計算に基づいた政治の必要性を説いた。彼が著した著作は、手段を選ばない権謀術数主義のためにプロイセンのフリードリヒ大王などに指弾されることもあったが、近代的な政治理論の先駆けとなった。

フィレンツェで活躍した芸術家たちはこのような動きの中で才能を活かすべく新天地を求めて各地に散っていった。ラファエロらは新たな文化の中心となったローマ教皇庁で活躍して、ヴァチカン宮殿の装飾やサン＝ピエトロ大聖堂の建設に関わった。一方で、レオナルド＝ダ＝ヴィンチやチェッリーニらはフランスへと向かった。

（ A ）年はヨーロッパの政治的状況が大きく変わるとともに、新しい文化の広がりの可能性を象徴する年だったともいえるだろう。